2022 年度 福祉助成金（活動助成）成果報告書

<table>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="2">かぶしきがいしゃ　ありがとうふぁーむ</td></tr>
<tr><td>団体名</td><td colspan="2">株式会社ありがとうファーム</td></tr>
<tr><td>代表者名</td><td colspan="2">木庭康輔</td></tr>
<tr><td rowspan="4">連絡先</td><td>住所</td><td>700-0822 岡山市北区表町３－７－５</td></tr>
<tr><td>TEL</td><td>086-953-4446</td></tr>
<tr><td>E-mail</td><td>info@arigatou-farm.com</td></tr>
<tr><td>URL</td><td>https://www.arigatou-farm.com/</td></tr>
<tr><td>設立年（西暦）</td><td colspan="2">２０１４年</td></tr>
<tr><td>助成活動名</td><td colspan="2">アートのチカラでインクルーシブ教育の推進</td></tr>
<tr><td>助成額</td><td colspan="2">900,000 円</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動内容</td><td>目的</td><td>「アートや表現活動によってインクルーシブ教育が実現可能であることの検証事業」

アート活動を媒介としてインクルーシブ教育を実践するアイデア実験室「ハブラボ」の参加者およびその保護者、関わっている障がいをもった講師に継続的にヒアリングおよびアンケートをとり、ハブラボ参加前後の変化を１年かけて調査し、アート活動がインクルーシブ教育に有効であるかどうか、文部科学省が提唱する新しい時代に生きる子どもたちに必要な３つの力（新しい学習指導要領「生きる力 学びの、その先へ」 ①学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性など ②実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能 ③未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など）を養うことができるかどうかの検証を行う。

＊補足
アイデア実験室「ハブラボ」とは
私たちが目指す社会地域は、障がいの有無に関わらず誰もが持てる力を発揮することができ、助け合いながら生きる共生社会である。アート活動は１つの正解に向かうのではなく個々の感性を発揮し掘り下げ、またどんな子でも参加しやすいため、活動の主軸に置いている。幼少期の経験が生涯における「生きる力」の基礎をつくることを鑑み、参加対象を児童にしている。障がいをもつ人が講師を務め、子どもたちも障がいの有無に関わらず参加・交流でき、小単位の共生社会を体験できる場で SDGs を視野に入れ岡山県内企業廃材をアート素材として創作活動に再活用し、レッジョエミリアアプローチをベースに子供の自主性と協調性を育てるプログラムを実施している。</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>「ハブラボ」アートワークショップ開催日
2022 年 4 月 29 日(土)、30 日(日)／5 月 4 日(水)、5 日(木)／6 月 18 日(土)、19 日(日)／7 月 18 日(月)、25 日(月)／8 月 3 日(水)／9 月 24 日(土)、25 日(日)／10 月 23 日(日)／11 月 19 日(土)／12 月 17 日(土)／2023 年 1 月 15 日(土)／2 月 18 日(土)／3 月 26 日(土)

岡山市教育委員会の後援をもらい毎月 1 万部小学校に配布。
インスタグラムでも告知を行った。
https://www.instagram.com/hublab_okayama/
障がいの有無に関わらず参加可能なことを明記している。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td></td><td>2021 年から継続している「オモテチョウひろば」づくり（弊社から徒歩 2 分の空き地を利用した広場作り）を中心に行った。子どもたちは、ひろばの壁に絵を描いたり、ベンチ作り、旗づくり、テントづくりなどを行い、参加者と協力しながら自らの手で街をつくっていく体験をした。誰もが文化をつくる一員になれること知ってもらうために 10 月には岡山芸術創造劇場と共催で「ハレノワぐるり徒歩ツアー」を実施。クイズを解きながら千日前商店街の歴史に触れたり、大劇場の大きさをメジャーで測ったりした。また自分の感覚に耳を傾ける活動として「音を描く」ワークショップを実施。手だけでなく全身を使い、音色やリズムに合わせ線で表現した。
平日は第 3 の居場所利用を目的とし、いつでも来れる工作室としてハブラボを開放した。</td></tr>
<tr><td>成果</td><td>「前年度より障がい特性のある子どもの参加が増えた」
参加者のうち 1 割が特性があることを明らかにしている。子どもの声に耳を傾けるための環境作りとして、15 名の参加者に対し、5 名のハブラボスタッフ、2 名の大学生ボランティアを配置。これにより学校の教室では、じっと座ることが苦手な子、発言が苦手な子等にも合わせた対応が可能となり各々のペースで取り組むことが出来た。

「障がいを持つ講師の成長」
出来ないことに焦点を当てるのではなく出来ることに目を向け実践することができた。緊張のためにパニック症状を引き起こし講師業務を行えそうにない時は、職員や仲間に連絡・相談し、その状況を乗り越えることが出来たメンバーもいた。

アート活動がインクルーシブ教育の場を生む可能性があることを明らかにするため参加者アンケート調査を実施し、活動内容をまとめた冊子制作・ドキュメンタリー制作と展示会を開催、より多くの人に活動を知ってもらう機会を作った。冊子は教育機関、支援校、福祉事業所など約 300 ヵ所に配布。

活動報告冊子(web 版)
http://hublab.html.xdomain.jp/book/#page=1

ドキュメンタリー「アートの先に生きる力を」
https://www.youtube.com/watch?v=gXVx5XgLs8E

活動報告展覧会
2022 年 12 月 2～4 日　天神山文化プラザ第一展示室にて開催</td></tr>
<tr><td>今後の課題と対応策</td><td colspan="2">①障がい特性の強い子のためのプログラムの必要性。
2022 年 11 月に岡山県立南支援学校に出張ハブラボで訪問した際に課題が見えた。
支援校に通っている生徒の多くは、たくさんの材料の中から自分で選ぶことが苦手だというアドバイスを受け、選ぶ材料の数を限定したワークショップを開催。ところが、どうしていいかイメージがつきにくい子たちも多くプログラム内容の見直しの必要性を感じた。
同時に親御さんたちのレスパイトケアの必要性も感じた。
対策として、障がい特性の強い子のためのプログラムづくりを行う。「何つくる？から、はじめよう」というハブラボのコンセプトを残しつつ、見本を用意したり、何をつくるのかはっきりと見通しのつくプログラムをつくっていく。

②障がいをもつ講師たちの体験の不足
この事業に関わる講師たちの多くは、不登校やひきこもりの経験者である。今も自宅と仕事場の往復が生活の中心である。人生を豊かに生き、子どもたちも自分たちも生き生きと楽しめるような活動プログラムを考案していく上で体験が少ない現状がある。経済面体調面から見ても、外に出かけることが難しいことも理由の一つにあげることが出来る。
対策として、外部からアーティストを招聘し講師たちとの交流の場、創作活動の場を設ける。</td></tr>
</table>

写真の提出

「宇宙船のベンチづくり」
商店街の路上にブルーシートを広げベンチに色を塗ったり飾り付けをしたりしました。
車椅子ユーザーの子も活動に参加しました。

「空の旗づくり」
大学生ボランティアが毎月参加し、インクルーシブ教育の実践を学びに来ています。

「音やリズムを描くワークショップ」
手だけでなく全身を使い、自分のもつ感性に耳を傾け、音色を線や色で表現します。

「ハブラボ講師：アートの先に、生きる力を」
私たちは障がいをもっていますが、出来ないことに焦点を当てるのではなく出来ることに目を向け実践しています。アート活動を通して、障がいの有無に関わらずどんな子どもたちも参加できる場づくりをし、インクルーシブ教育がやがて、インクルーシブな共生社会に繋がることを目的に活動しています。

「ハブラボキッズ作品展示・活動報告記録上映」
2020 年から活動を始めて、初めて展覧会を開催し、活動報告冊子やドキュメンタリー映像も作ることが出来ました。教育機関、支援校、福祉事業所など約 300 ヵ所に配布することができました。
助成いただき誠にありがとうございました。